

Jessica's First Prayer と *Jessica's Mother* を「祈り」から読む

西村 醇子

はじめに

ヘズバ・ストレットン (Hesba Stretton, 1832-1911) とは、イギリスの女性作家サラ・スミス (Sarah Smith) が用いた筆名である。スミス家はメソジストで、シュロップシャーに住んでいた。1842年の母の死後は、長姉が家族の母がわりをつとめた。またきょうだいで父の郵便局業務を手伝っていた時期もある。

本名のサラ・スミスは、作家の名前としては平凡だったため、1858年から筆名を使い始めたという。ちなみに名前の「ヘズバ」は、生き残ったきょうだい¹のイニシャルを組み合わせたもので、苗字の「ストレットン」は地元の村名からとったものである。以下本稿でも「ヘズバ・ストレットン」という表記を使う。

H	Hannah ; 長女 (? -1886)
E	Elizabeth (Lizzie) ; 姉 独身 (1830-1911)
S	Sarah ; 本人 独身 (1832-1911)
B	Benjamin ; 弟 1851にカナダへ移住
A	Annie ; 妹 (b.1837) 地元の画家と結婚

ヘズバは、自分及び家族の生計をたてるためにペンで稼いだ。Religious Tract Society (以下 RTS と略す) とかかわりをもつことができてからは、おもに RTS から作品を出版、ベストセラー作家の1人として地位を築き、生涯を独身で過ごした。

19世紀に児童を対象とした作品で認められ、ベストセラー作家として英米で何作も発表し続けた女性作家が、その後は児童文学の作品以外、ほぼ忘れられる——こうした展開をたどった作家といえば、バーネット (Frances Hodgson Butnett, 1849-1924) の名前が挙げられる。ヘズバと同年生まれのアメリカの作家オルコット (Louisa May Alcott, 1832-88) もまた、後にフェミニズム批評で小説が再評価されるまで、子どもの本以外の作品はほぼ忘れられていた。言い換えれば2人は読みつがれてきたのが子ども向けの作品だった点が共通する。

ヘズバ・ストレットンもまた大人向けの小説を複数書いたが、代表作は子どもの本の *Jessica's First Prayer* である。この本は現在でも入手できるが、どの程度子ども読者に読みつがれてきたかについては、はっきりしない。また、国内の一般的な児童文学関係の本では彼女の名前を見つけることはできないし、研究対象としてもバーネットやオルコットのレベルには及ばない。

ヘズバを取りあげている数少ない研究書は、カーペンター & プリチャード (Humphrey Carpenter, Mari Prichard) の *Oxford Companion to Children's Literature*² やピーター・ハント (Peter Hunt) 編『写真とイラストでたどる 子どもの本の歴史』のような辞典ないし通史が中心だった。後者では、ヘズバは「子どもを社会の犠牲者と考え」、「絶望的な困難をものともせず、物理的にも精神的にも生きのびるために奮闘する」姿を、鋭い観察力で描くことで、「貧しい子どもたちに対する認識」を変えた作家で、「物語を語る手腕と、当時の世論にも後世の作家たちにも影響を与えたという点に関しては、もっと評価されてよい」³とされている。

筆者は RTS の出版物を調査する過程で、*Jessica's First Prayer* が19世紀のベストセラーであったことを知り、作者のヘズバ・ストレットンに関心をもった。RTS の看板作家となった秘訣や作家としての戦略を知りたいと思ったのである。本稿では代表作と続編の2作に的を絞り、19世紀という時代を考慮しながら、ヘズバが対照させている両作品の「祈り」に注目して作品を考察したい。

1. *Jessica's First Prayer*

1. 1 ダニエル (Daniel) からジェシカ (Jessica) へ

Jessica's First Prayer (以下;*Jessica*) は、1866年に *Sunday at Home* 誌に掲載され、1867年に出版された。ヘズバ作品ではもっとも成功し、その人気も持続した。そこでさまざまな版形と価格で出版され、彼女が亡くなった1911年までに、200万部ないし250万部に達したという⁴。

最初に1章“The Coffee-Stall and Its Keeper”の冒頭部分を提示する⁵。2文目を省略し、各文に番号をつけた。①が③や④に比べると3倍ぐらい長いのがわかると思う。

① In a screened and secluded corner of one of the many railway bridges which span the streets of London there could be seen, a few years ago, from five

o'clock every morning until half-past eight, a tidily set-out coffee-stall, consisting of a trestle and board, upon which stood two large tin cans, with a small fire of charcoal burning under each, so as to keep the coffee boiling during the early hours of the morning when the workpeople were thronging into the City on their way to their daily toil... ③ He was a tall, spare, elderly man, with a singularly solemn face, and a manner which was grave and secret. ④ Nobody knew either his name or dwelling-place ; unless it might be the policeman who strode past the coffee-stall every half-hour, and nodded familiarly to the solemn man behind it. (Ch.1; 5-6)

冒頭から浮かぶのは、街角のコーヒースタンドで朝食を販売している男性とその周辺の状況だ。このときは身元の情報は伏せられているが、④の文章は男性が警官と良好な関係にあり、少なくとも犯罪とは無縁らしいと推測できる。①にあるように、男性は遅くとも8時半には移動販売を終え、すぐにどこかへ立ちさる。なんとなく謎めいていて、読み手はおのずと好奇心をそそられる。この人物の名前がダニエルであることは2章で⁶、朝の時間限定に販売を限っていた理由は3章でわかる。このように情報を故意に小出しにし、作者は読者が物語を読みつづけたいと思うように工夫を施したと思われる。

この日ダニエルは、みすぼらしい身なりの少女が朝食用のパンとバターを“with a gaze as hungry as that of a mouse which has been driven by famine into a trap” (Ch. 1; 8) と見つめていることに気づく。少女（書名の人物ジェシカ）と言葉を交わしたダニエルは、母親が帰宅しないせいで一晩中閉め出されていたこの少女に、残り物のパンとコーヒーをふるまう。だが親切心を発揮したことをすぐ後悔したのか、つぎの水曜までは近づくな、と釘をさす。

ダニエルとジェシカの交流はその後進展する。きっかけは“good”をめぐる両者の2章でのやりとりだった。ジェシカは、自分に“good coffee”をふるまってくれるダニエルを“very good man”に違いないと言う⁷。だが彼は素直にその言葉を受け入れられない。それどころか、この章のタイトル“Jessica’s Temptation”が示すように、わざと小銭を落としてジェシカの反応を試している。

ダニエルが予想していたとおり、ジェシカは落ちた小銭をいったん自分の足で隠す。しかし、彼が盗みを働いたと責めるまえに、顔を赤らめ、小銭を拾いあげて手渡してきた。ジェシカは自分が何をしようとしたかをわかっている、コーヒースタンドへの出入りはもうできないと覚悟していた。するとダニエルは“I could never have done it myself.” (22) とつぶやき、今後は水曜ごとに朝食をあげると約束している。

この言葉をジェシカは、ダニエルはとっさに金を隠すようなことをしないという意味だと受けとめたが、ダニエルのほうでは彼女の葛藤を理解し、自分が同じ立場なら金を返さなかったかもしれないと考え、つぶやいたと思われる。

これ以降、ダニエルが無料の朝食をふるまう側、ジェシカがそれを受ける側、という2人の関係が成立した。それゆえ、おとな（ダニエル）の視点で子ども（ジェシカ）を見守っていくこと、そしてダニエルがジェシカを助ける役回りをも果たすことが予想できる。実際、物語の展開は読み手のこうした予想を裏切らない。だが、無垢で善良な子どもが周囲の人に影響を及ぼす、たくさんの孤児物語⁸と同様、この物語で救われるのはジェシカだけではない。

1. 2 教会と牧師と

さてダニエルがコーヒースタンドでの仕事を朝に限定していたのは、ほかに本業があったからだ。3章で作者はまずジェシカの暮らし（住まいと母親からの仕打ちなど）を述べる。その後、偶然ダニエルをみかけたジェシカが彼の後をつけて、立派な建物（教会）に入るところを目撃させる。つまりジェシカの底辺の暮らしから、ダニエルが出入りする紳士淑女の集まりの場へと読者の視点を移動させ、両者の差異を目立たせている。こうした対比を利用した描写は、ヘズバがたびたび用いている技法のひとつである。

教会の内部は最初薄暗かったが、ダニエルがガス灯をともしにつれ、通路に敷かれた絨毯、背の高いオーク製の座席、輝くパイプオルガンなどを擁する荘厳な場所として、たち現れてくる。一見したところ、「聖」を代表する場所に釣り合った描写とみえる。

この日、ダニエルはジェシカが教会に忍びこんでいることに気づき、すぐさま追い払おうとする。自分の秘密が露見することを懸念すると同時に、紳士淑女のために存在している場所に彼女がふさわしくないと考えたからだ。しかしジェシカはこっそり扉の陰に隠れて教会音楽を耳にする。そして教会という場所に楽しみを見だし、その後も日曜のたびに教会に忍びこむようになる。

そんなジェシカを見つけたのは牧師の2人の娘だった。ぼろを着て髪の毛に櫛も入っていないジェシカの姿は、この教会とは場違いな存在である。年上のジェーン（Jane）はすぐにそれに気づくが、ウィニー（Winny）は父親が説教に使った聖書の言葉⁹を引き合いにだし、自分たちの行為はそれと反するのではないかと主張する。対応に困った姉妹は、結局父のもとへ連れていき判断をゆだねる。

ジェシカが自分の後をつけて初めて教会に現れたとき、ダニエルは教会とは紳士

淑女が祈りのために来るところであり“minister”が神の言葉を伝える場なのだから、ジェシカの居場所はないと言った (Ch.3; 31-33)。このときのダニエルの言葉が聞きなれないもので理解できなかったジェシカは、5章で初めて牧師に対面すると、まさきに“minister”とは何かと訊ねている。牧師の第一声は“servant” (Ch.5; 49) だった。これは通常は「しもべ」すなわち使用人をさす言葉だから、そばに居合わせた娘たちならずとも、その意味がわかる者は一瞬ぎょっとするだろう。でも牧師は、自分は“The servant of God and of man” (49) だと、すぐに言いなおす。このあとジェシカと牧師の対話は、礼拝をはさんでおこなわれ、牧師はひとつひとつジェシカの疑問に答えてやっている。

この作品のジェシカは、ほろを着た貧乏人であるばかりか、キリスト教の信仰に縁がない子どもである。父の説教を通じて聖書の言葉に素直に親しんでいた2人の娘は、ジェシカのような子どもに初めて出会ったのだろうか。現実と日頃きく説教の言葉とのギャップを感じ、戸惑っていた。しかしおとなである牧師はごく自然にジェシカを受け入れた。そしてジェシカに宗教上の知識がまったくないことを配慮し、きわめて平易な言葉で説明をおこなっている。それはそのまま、読者にも親切でわかりやすい説明といえよう。

‘God is your Father,’ he answered very gently; ‘He knows all about you, because He is present everywhere. We cannot see Him, but we have only to speak, and He hears us, and we may ask Him for whatever we want.’ ...

‘O God! I want to know about You. And please pay Mr. Dan’el for all the warm coffee he s[sic] give me.’ (Ch.6; 55-56)

後半の引用は、牧師に説明されたジェシカが、願っていることをそのまま口にしたもの。「祈り」と呼ぶには型破りだが、牧師はその場で“Amen”とつけ加えることで、これを彼女の‘first prayer’として承認している。

1. 3 「祈り」がかなうとき

神に祈りをささげてもそれが聞き届けられるとは限らないのが現実だが、ジェシカにはそんな考えは通用しなかった。水曜の朝ダニエルのまえに現れると、あれから何度も祈ったのだから、神が祈りを聞き届けて朝食代を払ってくれる日も近いはずだ、と自信をのぞかせている。

でもダニエルが気にしていたのは自分の秘密の露見だった。これからも副業のこと

は牧師に黙っていてくれと頼んでいる。彼は“the folks at our chapel are very grand, and might think it low and mean of me to keep a coffee-stall. Very likely they'd say I mustn't be chapel-keeper any longer, and I should lose a deal of money.” (Ch.7; 59) と恐れていた。

ここで気になるのは、ダニエルが朝食販売の仕事は、教会関係者に“low and mean”とみられると考えていた点だ。10章でも、牧師に自分にはそういう懸念があったことを告白している。しかし、もし教会が労働者階級にも広く門戸が開かれている場だったなら¹⁰、彼もこのような卑下した考えをせずに済んだと思われる。

牧師は初対面のときに限らず、一貫してジェシカへ思いやりのある態度をとり続ける。8章で彼女の住まいを訪ね、手助けを申し出たのがその表れである。ただ、母親の性質をよく知るジェシカには援助が無駄になることがわかっていた。そこで妥協案として、牧師が朝食代を負担することに落ち着く。ただし、援助の対象はジェシカだけである。言いかえれば、牧師が社会にいるあまたの不遇な子どもを視野に入れた形跡はない。

願っていることを神に祈るとやがてそれが実現する、というプロットはヘズバのほかの作品にも見られるが¹¹、福祉制度の未発達だった当時の社会の現実に鑑みれば、あまりにロマンティックな筋立てである。客観的にみれば、ジェシカのような境遇の子どもはきちんとした衣食住やおとなの保護者を必要としている。だが当事者の彼女はそういう発想をもっていないし、また発想もできなかったと思われる。だから、前節に出てきたように、ジェシカがお祈りでまず口にしたのは、恩人ダニエルに報いることだった。その願いはささやかだったため、牧師も実現させやすかったのかもしれない。

改めてダニエルとジェシカの間をみておくと、まず週一度「朝食を無料でふるまう＝慈善行為」「その好意（行為）を受ける」ことで成立した。その後牧師が朝食代を負担したおかげで、ダニエルとジェシカは形式上「店主」と「客」の関係になる。ジェシカがおこなった初めての型破りな祈りはこうやって牧師自身によって叶えられたが、当の牧師が蚊帳の外に置かれている状況は続いていた。

つぎに、ジェシカの別の型破りな祈りについてみておく。

1. 4 「祈り」とその取り消し

ある日曜、ジェシカは教会の礼拝に来なかった。教会で1週間分の朝食代を渡していた牧師は、彼女が来なかったことにほんやりと不審を抱いただろう。しかし毎朝コーヒースタンドで会うダニエルからみれば、ジェシカが連日姿を見せていないこと

が気になったはずだ。そこで次の日曜礼拝にも現れなかったとき、心配を募らせたダニエルは日頃の用心深さを捨て、牧師にジェシカの居場所を教わっている。

その日のうちにジェシカが暮らす厩に着いたダニエルは、“Our Father, ... please to send somebody to me, for Jesus Christ's sake. Amen.” (Ch.9; 78) という弱弱しい声を耳にする。ダニエルは大急ぎで、自分はその祈りにこたえて来たのだと安心させている。

薄暗がり、掛け布団もなく独りぼっちで横たわっていたジェシカ。その彼女に、ダニエルは自分がいかに罪びとであったかを語る。

I've been constant at God's house, but only to get *money*; I've been steady and industrious, but only to get *money* ; and now God looks at me, and He says, “Thou fool!”

... I've been loving *money* and worshipping *money* all along, and I've nearly let you die rather than run the risk of losing part of my earnings. I'm a very sinful man.’ (Emphasis Added) (Ch9; 80-81)

先の7章の引用文（1.3参照）からも、ダニエルが金銭に執着していることは明らかだ。教会の仕事で得る収入に加え、コーヒースタンドでも日銭を稼ぐダニエル。労働者のニーズにあわせた着眼のよさといい、労を惜しまず勤勉に働く態度といい、彼の勤労意欲は、一般的にみて間違いなく称賛に値するはずだ。カット（Margaret Nancy Cutt）によれば、coffee-stallは1860年代には普及し、コーヒーはジンにたいする無害な代替として称賛されていたという。つまりダニエルは‘self-help’の賞賛すべき実例だった（139）。だが、残念なことにダニエルの貯蓄には目的がなかった。先に、お金を神に差し出すのかとジェシカに問われて返事ができなかったのもそのためだ。ダニエルには扶養する家族はいないし、他人に慈善をおこなう意志もなかったのである。

金銭に大きな関心をもつダニエルは、「世俗」を代表する一般市民の1人だろう。そして、「聖」を象徴する教会という場で毎週牧師の言葉を耳にしていても、いわば魂を失った状態だったことになる。

熱を出し青白い顔で横たわっていたジェシカは、ダニエルの告白を受け、“please to make Mr. Daniel's heart soft, for Jesus Christ's sake. Amen.” (Ch.9; 82) と祈る。ダニエルは深い後悔の念に駆られる。彼は翌朝医者に診てもらおうと、ジェシカを自宅へ連れ帰る。そしてジェシカが危篤だと、手紙で牧師を呼び寄せる。手紙に応じて牧師が訪れると、これまで2人が隠してきた金銭のやりとりを告白する。また、全財産

を引き換えにしてもジェシカに助かってほしいと述べる。彼の生き方が、ジェシカとの出会いで変化したことが示されている。もっともこの時点のジェシカは、まだ死の危険を脱していない。

ジェシカは2人のおとなが見守るなかで、再び神に祈る。

“I asked You to let me come home to heaven ; but if Mr. Dan’el wants me, please to let me stay a little longer, for Jesus Christ’s sake. Amen.” (Ch.10; 92)

つまり、さっきまで天国へ行かせてほしいと願っていたが、それを取り消したいという祈りだった。これはジェシカがおこなった最初の祈り以上に型破りなものだろう。祈りを終えたジェシカはそのまま熟睡し、その後回復にむかっている。どうやら取り消し（の祈り）には効き目があったと思われる。

カットは、ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は19世紀の tract fiction writer たちの系譜を引き継ぎ、かつ貧者、老人、ネグレクトされた人びとの日常に内在する ‘pathos’ を劇的に利用していったという。そして、ディケンズが利用して強化した device を継承しながらも、そこに独創性と深みを加えたのがヘズバの *Jessica* だと指摘している (108-109)。この場面はカットのいうように、ディケンズの device にひねりを加えた箇所だろう。

不遇な境遇にいたジェシカは、信仰を得て救われた。そして *Jessica* は、宗教の基本について、牧師が無知な少女に語る形式をとり、読者にたいしてもこれらの知識をわかりやすく教えていた。それは読者が子どもであれ、おとなであれ受け入れやすいものであった。だが9章、10章でジェシカの放つ素朴な問いかけはダニエルに影響を与える。彼は見失っていた真の信仰を取り戻したのである。つまりヘズバは、device としての臨終場面を下敷きにして、ジェシカに導かれて変化するダニエルを描いていたこともわかる。

Jessica の陰の主演がおとなのダニエルだったとしても、RTS の出版方針に反するものではなかった。ファイフ (Aileen Fyfe) によれば、RTS では、*Jessica* に先立つ1840年代から50年代に、活動の対象を heathen industrial working classes をキリスト教に改宗させることから、middle-class evangelicals and their families をターゲットとして啓蒙的な単行本を出版することに変えていた¹²。ロマックス (Elaine Lomax) もまたその著書で、RTS の読者対象にかんしては “to reach not only children, but also parents or adults of the ‘lower-classes’” (52) を試みていたと指摘している。

Jessica は、おとな読者にも子ども読者にも訴えかける crossover fiction だった。それが幸いして成功したのだと思う。そこでヘズバは、続編 *Jessica’s Mother* で、2人

が遭遇する新たな葛藤を描いている。

2 *Jessica's Mother*

Jessica's Mother は1867年に *Sunday at Home* 誌に掲載されたが、単行本となったのは1904年だった¹³。 *Jessica* に熱狂した人も、この続編にはそれほど熱狂できなかったのだろうか。今言えるのは、 *Jessica* はプロットがシンプルであり、結末での「救い」が読者に一定の安心感や満足感をもたらしたのに比べて、続編の結末にはほろ苦さがあったことである。

続編ではおもにダニエルの視点が採用されている。途中でジェシカが苦しみ悩む場面もあるが、それらはダニエル相手の会話で明かされるので、読者は「おとな」のダニエルに寄りそって読むことになる。ヘズバは“fallen woman”を描くのにあわせて、想定読者の年齢を高めにしていたかもしれない。

2. 1 3年後

物語は一年でも薄暗い時期のロンドンが、霧のせいで昼も夜も薄暗いという描写から始まる。まずそれをみたい。以下の引用では第1段落と第2段落の文章に連番をつけた¹⁴。

① It was a gloomy Sunday in the gloomiest part of the year, when the fog hung over London day and night, only lifting itself off a little for two or three hours about noon time. ② The bells which rang from the church towers might have been *chiming from some region above the clouds*, so distant they sounded and so hidden were the belfries in which they hung. (Emphasis added) (*Mother*, Ch.1; 7)

次の3文目からは第2段落で、まず外を行きかう人びとの様子が述べられる。4文目は長く、最初に外の暗さと建物の明るさの対比、つぎに教会の開かれたドアが教会に通行人を招き入れているようだという表現がある。セミコロンのあとに以下の文章が続く。

④...; but as if these buildings, the temples of God, were designed only for the

rich, and for those who had comfort enough in their own dwellings, it was noticeable that but a very scanty sprinkling of worshippers dressed in vile raiment were to be seen among the congregations, though there was no lack of those who wore goodly apparel and gay clothing. (*Mother*, Ch.1; 7)

これら1章の冒頭から読みとれるのは、どこの教会も富裕層ばかりを惹きつけている状況である。②の文で、教会の鐘が遠くから鳴っているように聞こえたところもあるのも、教会のもたらず恩恵が大眾にまで届いていないことの暗喩だろう。なお冒頭に描写されていたロンドンにたちこめる霧は、視界の妨げとなり、それが物語の展開にも関係するが、当時ロンドンが見舞われていた大気汚染の現実を反映してもいたであろう。

さてダニエルが働く fashionable な教会では牧師の説教が人気を呼び、説教を聴こうとする聴衆が毎週増えつづけた結果、もう1人座席案内役が雇われていた。1章はまた、教会に関係する人びとがよく口にしていた2つの話題も紹介している。1つは多忙な牧師のために、説教を交代できる人を早く見つけること、もう1つは今より大きくかつ“more fashionable chapel” (8) を建てることだった。もっとも後者についてはすでに準備が進んでいたため、前者の、牧師の同僚を早く見つけることが重要になっていた。

牧師は現在45歳だと思われるが¹⁵、疲弊が懸念されているところからみて、あまり頑健ではないらしい¹⁶。ここまでは、3章で牧師が病に倒れることへの伏線となっている。

じつは牧師が倒れるまえに、2つの出来事があった。1つは牧師が礼拝のまえにジェシカを呼びとめ、自分の礼拝が理解できているのかを確認したことだ。ジェシカが正直に、わかるのはまえに教わった神やキリストや天国に関する部分だけと答えると、牧師はその週に入念に準備してきた説教——“of great research, and of studied oratory, which should hold his hearers in strained and breathless attention” (13) ——をおこなわず、もっと率直にキリストの言葉を伝える決心をする。

もう1つは、牧師がダニエルに大事な話があるので、礼拝後に来てほしいと言ったことだ。もっとも、牧師は説教前の祈りをささげる段階で意識を失ったため、それどころではなくなる。

医師が呼ばれ、すぐに“It is not death, but a stroke” (Ch.2; 15) と聞かされる。牧師の子どもたちが“stroke”の説明を求めると、ジェシカは母親と暮らしていたときの“stroke” (殴打) と違って、“this stroke comes from God, and it cannot be very bad” (16) と説明している。その解釈の適否はともかく、牧師の stroke (脳卒中)

は、説教準備で頭を酷使したのが原因らしい。母親を以前に亡くし、牧師の父とナースと暮らしていた2人の子どもは、世慣れているジェシカを心の支えとして、一晩とどまってくれと懇願する。

前作 *Jessica* で2人の娘は初対面のジェシカへの対応に困り、判断を父にゆだねた。ところが、今回はその父が倒れたため、娘たちは当のジェシカを頼ろうとする。3年間の成長があまり感じられない娘たちと、今ではしっかりと対応できるジェシカの対比を描いた場面である。

ダニエルはこの日ジェシカを牧師の家に残し、ひとりで帰宅する。歩きながら、礼拝後に牧師が話そうとした内容を推測してみる。昇給の話だろうか、それとも何かジェシカに関わることだろうか。これは読者にも謎として提示するつもりだったのかもしれないが、ダニエルが帰宅した時点でジェシカの母親が現れ、ダニエルはその対応でいっぱいとなり、「謎」の牽引力は置きざりにされる。ダニエルが牧師の話は母親の件だったと思いついたのは、少し後になってからだった。

2. 2 ダニエルとジェシカ

ダニエルは中庭に面した自宅の戸口にうずくまっている女性を見ても、それが誰だかわからなかった。ただ近隣住人の手前、戸口で“I want my daughter,” “my Jessica, my daughter” (Ch.3; 23) と騒ぐ女性に困惑する。相手はジェシカの母親だと主張しているし、キリスト教徒として暴力に訴えて追い払うこともできない。対応に困ったダニエルは、隣人男性の助言に基づき、その晩の宿代にと1シリングを渡し、ひとまず母親を追いかえす。

ダニエルはこの件を牧師に相談したかったので、“he lamented on his account that he could not go for counsel to Jessica’s other friend, the minister who had been stricken into silence and unconsciousness” (Ch.3; 27) と思う。母親が訪ねてきたことをジェシカに打ち明けると、意外にもジェシカは自分の親だから、会いたいという。ダニエルをさらに驚かせたのは、数日後現れた母親が強引にダニエルの家に居座ろうとしたときのジェシカの反応だった。ここはダニエルさんの家なのだから泊まることはできないと、母親にたいしてきっぱりした態度をみせる。だがこのときの母親は“drunken and disorderly” (Ch.5; 35) で、自分を追い出すなら娘もいっしょに行くのだと譲らない。そのときジェシカが選んだのは、古服に着替えて母といっしょにダニエルの家を出ていくことだった。

翌日、仕事中のダニエルに食事を届けにきたジェシカは、酔いがさめた母に神の教えを伝えたときの様子を打ち明ける。母親は彼女の言葉に耳を貸さなかったばかり

か、キリストも天国のことも、彼女が生まれる前からとっくに知っていたと言ったらしい。牧師が話せば母親を変えられるのではと、期待するジェシカに、ダニエルは、あの日曜午後に牧師がすでに母親と会っていたと伝える¹⁷。つまり牧師は病気で話ができなくなるまえから、ジェシカの母親にたいして無力だったことが露呈する。

ジェシカの母親が送ってきた生活についてカットは、母親がダニエルに“I suppose I’m as good as my daughter. Ah, she’ll never be the woman I’ve been. I rode in my carriage once, man, I can tell you...” (Ch.3; 25) と述べた箇所を引用し、ヴィクトリア時代の一般人には、母親が裕福な男性の愛人だったことがすぐわかるし、おそらく今は“she is now on the streets”の境遇になっていることも読みとれるだろうと述べている (138)。

母親のかかえている闇は、おそらくダニエルやジェシカが想像できないほど深かったのだろう。*Mother* はそういう人間を神やキリストを語る宗教は救えるのかと問う、*Jessica* よりはるかに重たい作品になっている。

ジェシカの提案でダニエルとジェシカは神に祈る。このときダニエルは形式の整った教会風の祈りを避け、今の気持ちを素直に祈りの言葉にする。

“Lord, thou knowest that Jessica’s mother is come back, and ... we don’t know what to do with her, and the minister cannot give us his advice. ... I pray thee to take it [ie. money] away and make me see clearly what my Christian duty is. Dear Lord, I beseech thee keep both me and Jessica from evil.” (*Mother*, Ch.6; 42)

この祈りは、*Jessica* でジェシカがおこなった、率直な言葉での祈りの数々に対応する。それをジェシカに触発された祈り方とみるなら、ダニエルはもはや牧師に頼らなくなっている証拠とみえるし、ジェシカが今後 spiritual guide 的役割を帯びていくとも解釈できるかもしれない。そのことは結末でもう一度検証したい。

ジェシカの母親と関わるようになったダニエルは、自分の財政状況に目を向けた。これまでジェシカを養育し、家を維持する出費は、すべてダニエルが負担してきた。牧師も金持ちの信徒たちも、費用の分担を申し出ることにはなかったのだ。ダニエルはジェシカを引き取ったことを後悔していないが、母親の件はそれとは別だ。今となつては、“did God require him to waste—he said ‘waste’ to himself—his hardly-earned savings upon a drunken and wicked woman?” (Ch.7; 43-44) という悩みを抱いている。すでに医者も牧師が前のように働けないと診断している。だから新しい教会建築の話は流れるだろう。そして牧師の説教が目当てだった聴衆は教会に来なくなるだろ

うし、必然的にそこで働くダニエルの収入も減るだろう。彼の年齢を考えるとあと10年働けるかどうか。だからお金の心配は切実だった。

ダニエルは単に金銭面に加え、キリスト教徒として、ジェシカの母親への対応のしかたに悩んでいた。だがここで彼は、もしイエスの家にジェシカの母親のような女性が現れたら、と考えてみた。現状ではジェシカの母親を自宅に同居させることは無理だ。代わりに母親のために部屋を借り、そこで寝たり食事をとったりできるようにしておけばよいと、思いつく。その程度の負担なら自分にもできるだろう。

ここで注目したいのは、病気のせいで牧師に相談できなかったダニエルが、途方にくれる段階をすぎ、自分の信仰を見つめなおしてそこから解決策といえるものを導きだしていることである。

2. 3 ダニエルの祈り

次の日曜日に物語は大きく転換する。まず、牧師が意識を取りもどし、娘2人やジェシカと言葉を交わすことができた。その夜、牧師の家に泊まるジェシカを残して帰宅する途中、ダニエルはジェシカの母親らしき女性を見かける。女性は、下水工事の現場にあった火鉢のひとつ——警備員が警告灯兼暖房用に置いているもので、暖をとっていた。このときダニエルがまず感じたのは母親への嫌悪感だった。ところが相手のみじめな姿をみているうちに、これまで感じたことのない“an unutterable compassion”を初めて知る。

He even felt a sympathy for her, as if he had once been in the same depths of degradation, as he looked down shudderingly into the deep abyss where she had fallen by her sins; and the sense of her misery touched him so closely that he would have given his life for her salvation. (Ch.9; 54)

ここはダニエルがさらに一段階すすみ、相手に優しいまなごしを向けられるようになったことを示している。だが彼の胸中をよそに、声をかけられた母親はその場から逃げだす。後を追いかけたダニエルは古い橋と工事の橋が並んでいる川のところで、相手の姿を見失う。そして“a wild and very mournful cry” (55) を耳にするが、次の瞬間ダニエル自身が橋から足を踏み外し、積み上げられた石材の山に落下する。

ダニエルが意識を失っていたのは、真夜中を告げるセント・ポール寺院の鐘が打ち始めてから、打ち終わるまでのわずかな間らしい。でも身体の自由がきかなくなっているのに、助からないことを覚悟する。ただ、死ぬ前にジェシカに会って、母親が死

んだことを自分の口から伝えたいと願った¹⁸。医者に助かる見込みがないと診断されると、ダニエルは自宅へ連れ帰ってもらっている。

最終章の10章は、まずダニエルが亡くなるまでの数日間を描く。ダニエルが待ち望んでいた見舞客は牧師だった。そして牧師がやってきたのは、ダニエルの最後となる日。かろうじて間に合ったものの、牧師が口をひらくと“with a trembling voice which faltered often as he spoke” (59) というありさまだった。言葉をつかさどる力がなくなった今、もはや以前のように説教で神の栄光をたたえたり、会衆の心を動かしたりできないと悲しむ牧師。そこでダニエルは自分とジェシカが話してきたこと、すなわち、牧師は現世では無理でも、天国では再び牧師として話せるだろうと伝える¹⁹。ダニエルはまた、自分の亡きあとには牧師がジェシカを引き取ってくれると確かめ、安心して喜ばしき死を迎えている。

Jessica's Mother の最後は、*Jessica* とは対照的な「死の床」の場面になっている。*Jessica* でのジェシカは回復したが、*Mother* のダニエルは回復できない。明らかに「生」と「死」が対置されている。それよりも重要なのは、死にゆくダニエルと生き続ける牧師との関係がある意味で逆転し、後遺症に苦しむ牧師にたいして、ダニエルとジェシカが希望を与えたことだろう。ダニエルの死後、ジェシカが引き続き牧師を支える可能性も示されている。

ダニエルの死の直前、牧師はダニエルに聖書の一節を読む。このとき“*There was no stammering of the minister's speech as he pronounced these words, and his face grew bright, as did the face of the dying man.*” (61) となっている。

Mother の最後の段落は、ダニエルの死後の話になる。じつはここにはジェシカの名前は出てこない。かわりに述べられているのは、田舎に移り住んだ牧師が“*taught a simple congregation simple truths*” (62) という生き方に穏やかな幸福を味わっていることだ。

おわりに

Mother は *Jessica* にもまして、ダニエルを中心とした物語である。*Jessica* は、構図として世俗と聖を対比させたバランスのよい作品で、人びとの興味をひきつけたし、読みやすい作品だった。これにたいし、*Mother* では対比を用いる技法は使われているものの、全体として教会や牧師を否定的に扱っている。冒頭の描写からも、作者の皮肉が感じ取れるし、その後の展開もこれを裏付ける。牧師は、ダニエルとならんでジェシカの友というべき存在だったのに、ダニエルたちがもっとも必要としたとき

に、病気でとはいえ、沈黙を余儀なくされているからだ。

ディマーズによると、ヘズバは若い頃から“intensely critical of preachers” (134) だったという。カットも“The whole tone of her novels suggests that her religious convictions centred around rebellion against authority. ... Her children’s tales for the Religious Tract Society emphasized the Evangelical fundamentals of repentance and faith, Bible reading and prayer.” (123) と指摘している²⁰。実際、論者が読んだ範囲でも、*Jessica* 以降の物語に教会や牧師はほぼ登場しない。ヘズバは2作で扱えばもう十分だと感じたのかもしれない。

Mother でもう1つ気になるのは、ジェシカの母親とその出現による騒動が、彼女の事故死とも自殺ともとれる曖昧さのうちに幕引きがはかられている点だ。キリスト教では自殺を容認していないから、断定を避けたのかもしれないが、神への「祈り」が導いてくれたはずの解決策も、その有効性が試されることなく終わっている。あるいは、現実のもつ困難への思いが、作者にやや中途半端なこのような結末を選ばせたのかもしれない。

* 本稿は日本イギリス児童文学会第48回研究大会、2018年12月1日のシンポジウム I 「Religious Tract Society とイギリス児童文学」での発表を土台とし、改めて2作について書いたものである。

註

- 1 Cutt, *Ministering Angels* によれば8人の子どものうち、成長できたのは4人の娘と1人の息子だという (118)。ヘズバの経歴と作品リストは Rickard ほか複数の文献を参照した。
- 2 Daniel Hahn が同書の2版を2015年に出しているが、ヘズバ項目は旧版が詳しい。
- 3 ハント編『子どもの本の歴史』6章ジュリア・ブリッグス、デニス・バッツ「児童文学の多様化」p. 168 参照
- 4 Cutt (135) によれば200万部、Lomax (54) では250万部。
- 5 Hesba Stretton, *Jessica’s First Prayer* リプリント版 [以下 *Jessica* と略記] 引用ページはこれによる。
- 6 Full name が Daniel Standring であることは4章 (41) の牧師の娘たちの会話で読者にも明かされている。
- 7 *Jessica* pp. 17-18 参照

- 8 ジェリー・グリスウォルド『家なき子の物語』参照。
- 9 “For if there should come into your assembly a man with a gold ring, in goodly apparel, and there come in also a poor man in vile raiment :...” (*Jessica*, 43) この部分は James 2.2の引用だろう。版によって語句は多少異なる。(Biblehub.com をみると、*King James Bible* が近いと思われる。)
- 10 初めてジェシカをみかけたとき、娘たちは自分たちの信徒席には入れられないし、また “no poor people attended the chapel with whom she could have a seat” (43) と述べている。労働者階級の信徒がいないことがここからわかる。
- 11 たとえば *Little Meg’s Children*。その一方、*Under the Old Roof* では主人公はおもに勤勉に働くことで悲願だった家を取り戻している。ただし主人公の年齢は高いし、読者の想定年齢も子どもではないだろう。
- 12 Fyfe, *A Short History of the RTS*, pp. 26-27 参照
- 13 Lomax によると、1870年に単行本での出版が提案されたが、却下された (54)。同書の Bibliography (221) の説明に、*Part II of the complete ‘Jessica’ story* として1897年に出版されたり、RTS の ‘Penny Tales for the People series’ 中で1900年以前に出版された、となっている。
- 14 Stretton, *Jessica’s Mother*. [以下、*Mother* と略記] Minneapolis, Curiosmith, 2013. 以後テキストからの引用はこの版による。
- 15 ...the small provincial church which five-and-twenty years ago had thrust him, a mere youth of twenty, upon the exhausting duties of the ministry. (9)
- 16 *Jessica* でも “He was fatigued with the services of the day, and his pale face was paler than ever ...” (Ch.6; 53-54) と書かれていた。
- 17 ダニエルは発作の翌日牧師の家に見舞いに行き、ナースからジェシカの母と思われる女性が来て牧師と長い間話をしていたり、牧師が食事をふるまったことを聞いていた。
- 18 “her mother was dead, and gone —he could say nothing gentler— to her own place, which God knew of.” (Ch.9; 56)
- 19 このときダニエルにはもはや長く話す力がないため、ジェシカと2人で話してきた内容を語る役は、ジェシカに譲っている。
- 20 Elaine Lomax もまた、”her belief in an individual relationship with God and in a gospel of equality” や Distrust or criticism of the established church and organized religion” を裏付けている。p. 27 参照

引用文献

- Bratton, J. S. *The Impact of Victorian Children's Fiction*. Croom Helm, 1981.
- Cutt, Margaret Nancy. *Ministering Angels: A Study of Nineteenth Century Evangelical Writing for Children*. Five Owls Press, 1979
- Demers, Patricia. "Mrs. Sherwood and Hesba Stretton: The Letter and the Spirit of Evangelical Writing of and for Children." Ed. James Holt McGavran, Jr. *Romanticism and Children's Literature in Nineteenth Century England*. U. of Georgia Press, 1991. 129-149.
- Fyfe, Aileen. "A Short History of the Religious Tract Society." Eds. Dennis Butts and Pat Garrett. *From the Dairyman's Daughter to Worrals of the WAAF*. The Lutterworth Press, 2006. 13-35.
- Lomax, Elaine. *The Writings of Hesba Stretton: Reclaiming the Outcast*. Ashgate Publishing Ltd., 2009.
- Rickard, Suzanne. "A gifted author'—Hesba Stretton and the Religious Tract Society." Eds. Dennis Butts and Pat Garrett. *From the Dairyman's Daughter to Worrals of the WAAF*. The Lutterworth Press, 2006. 104-115.
- 'Hesba Stretton.' Humphrey Carpenter, Mari Prichard. *The Oxford Companion to Children's Literature*. OUP., 1984. 501.
- グリスウォルド、ジェリー 『家なき子の物語——アメリカ古典児童文学にみる子どもの成長』 遠藤育枝、廉岡糸子、吉田純子訳、阿吽社 1995 原著 *Audacious Kids: Coming of Age in America's Classic Children's Books*, 1992.
- ハント、ピーター編 『子どもの本の歴史——写真とイラストでたどる』 さくまゆみこ、福本友美子、こだまともこ訳 柏書房 2001 原著 *Children's Literature : An Illustrated History*, 1995.